

<報 告>

日本統治時代の台湾生活誌 ()

柴 公 也

(26) 女医の道

廖 里 (1918 年生) 彰化高等女学校 ; 東京女子医学専門学校卒

私の父は、台中州の豊原の神岡庄 (* 庄は内地の村にあたる) で雑貨屋を営んでおりました。父は書房に通っただけで学校には入りませんでした。母は全くの無学でしたが、纏足の陋習からは免れております。両親は教育熱心で、私を岸裡公学校に通わせてくれました。当時、女の子は五人に一人ぐらいしか公学校に通っていませんでした。学校の先生が家々を回って、学齢期の子供を勧誘していた時代です。

私のクラスは、40 人ぐらいでしたが、男女一緒のクラスでした。ただ、席は男女別々で左右に分かれていました。背の低い者が前に、背の高い者が後ろに座っていました。同級生の中には、12 歳で入学した者も何名かいます。

一年生から台中師範を出た台湾人の先生に日本語を習いましたが、台湾語を交えて教えてくれました。5・6 年生の時には、台湾人の先生から漢文を習いましたが、台湾語で上から下に読み下しておりました。

高学年になると、学校で台湾語を使うと罰金として一銭を取られるようになりました。罰金は貯めておいて、学校の経費に当てていました。いたずらしたりすると、鞭で手の平を叩かれましたが、むやみに叩きはしませんでした。

先生方は、台湾人だけではなく内地人の先生もいました。また、裁縫の授業があったので女の先生もおりました。男の先生方は普段から官服を着ていて、式日には肩章の付いた服を着て、サーベルを手にしていました。

当時は、制服はなく靴を履かずに裸足で学校に通っておりました。教科書を風呂敷に包んで、肩に斜めに掛けて通っていたのです。大人も、普段は裸足か下駄で、遠くに出掛ける時は地下足袋を履いていました。

公学校を卒業したら、裁縫や算盤を習う一年間の補習科に進もうと思っていました。1932 年の正月頃に、父から「補習科に入るよりは女学校に行った方が良い」と言われて彰化高女を受験することになり、運よく合格しました。岸裡公学校からは、4~5 人受けて、私一人が合格したのです。

当時、近所の子供たちは、親の仕事を手伝わなければならなかったもので、あまり学校には通っていませんでした。ですから上級学校に進む者もほとんどおらず、神岡庄から女学校に入ったのは、それまで三人しかいませんでした。

彰化高女は、一学年が二クラスで、一クラス 50 人でした。一クラスが台湾人で、もう一クラスは台湾人と内地人が半々でした。私は台湾人のクラスでした。卒業生には、さらに一年間の補習科が設置されていました。先生方は、ほとんどが内地人でした。女学校では、毎日勉強に追われて遊ぶ暇などはありませんでした。

彰化高女では、通学が出来なかったもので、寮に入りました。寮費は一ヶ月 11 円でした。家は、決して裕福な方ではなかったもので、叔父に援助してもらいました。叔父は内地人と一緒に石炭の仕事をしていて羽振りが良かったのです。

寮では、台湾人と内地人が一緒にの部屋でした。10 畳ぐらいの部屋に一年から四年まで 6 人が入りました。四年生が室長でした。木のベッドに布団を敷いて寝ておりました。机は部屋の真ん中に二列に並べて勉強していました。寮の規則は厳しくて外出もままならず、部屋でおしゃべりをするのが精々でした。お茶は自由に飲めましたが、間食は出来ませんでした。

食事は台湾料理のおかずでしたが、ご飯は蓬莱米（*ジャポニカ米の一種）で、好きなだけ食べられました。風呂にも毎日入れましたが、毎日朝から晩まで靴を履くようになったので、皆水虫に悩まされておりました。公学校時代は裸足だったので、水虫とは無縁だったのです。

彰化高女では、制服があってセーラー服にスカートでした。風呂敷ではなく、カバンを肩に掛けて通っていました。

台湾人と内地人の生徒は、喧嘩することなく仲良く付き合っていました。中には台湾人を馬鹿にしているような人もおりました。口には出しませんが、態度などで感じられるのです。先生方も概して公平に教えてくれましたが、やはり中には台湾人の生徒を軽視するような先生がいたことも事実です。

彰化高女を卒業すると、一年間の補習科に入って公学校の先生になる人が多かったのですが、私はオルガンが苦手でした。それで、父に「先生にはなりたくない」と話したところ、「それなら医者になったら良い」と言われ、医者を目指すことになりました。当時は、まだ女医は少なく、同級生の中では私だけでした。

ちょうど東京の帝国女子医学専門学校が彰化高女に募集に来ていたので、学校の推薦を受けて 150 円の入学金を納めました。巡査の月給が 30 円の時代です。祖父は、私が東京に行くことには反対でした。もともと祖父は、女は嫁に行くのだから学問などは必要ないという考えでした。その祖父の反対を押切って、両親は私を東京に行かせてくれたのです。

東京では、中野の下宿に部屋を借りました。そこには台湾人の学生たちが間借りし

ていたのです。その下宿に、偶々同じ豊原出身の東京医学専門学校に通っていた学生がいて、大変親切にしてくれました。

その学生に、帝国女子医学専門学校よりは東京女子医学専門学校の方が良いからと、東京女子医専の受験を勧められました。結局、勧められた通り東京女子医専を受けましたが、合格したので、もう一度入学金の150円を払うことになりました。早速父に電報を打ちましたが、父と叔父が何とか工面してくれたので東京女子医専に入学することにしました。

東京女子医専には、彰化高女の二年先輩の人がいたので、その先輩に紹介してもらって学校の寮に入ることになりました。面倒を見てくれた東京医専の学生には挨拶もせずに出てきたのが心残りでした。寮は設備が整っていて、生活には別に不自由しませんでした。大東亜戦争の前でしたので、食料も充分あり、ひもじい思いはせずに済みました。毎月25円を仕送りしてもらいましたが、遊ばず食べるだけなので充分でした。

寮では一部屋に6人が入りましたが、最上級生が室長を務めておりました。床は畳で、押入れがあり、布団を敷いて寝ていました。机は脇に一列に並べていました。食事は食堂で皆と一緒に食べておりましたし、風呂も毎日入れました。洗濯は自分でしていましたが、お湯が使えるので、冬でも辛くはありませんでした。ただ、部屋にはシラミが湧いて悩まされました。休みの日には新宿に出掛け、好きなお菓子を買って来て寮の仲間と分け合って食べていました。

東京女子医専には、支那や朝鮮、満洲からも学生が来ていましたが、お互いに直ぐ慣れて別にトラブルはありませんでした。寮には舎監がいて、門限がありました。五年間(*予科一年と本科四年)の在学中は勉強一筋でした。娯楽の少なかった時代ということもあって、ほとんどどこへも行かずに寮と教室を往復しておりました。時々、学校の旅行で日光や京都に行ったくらいでした。台湾には、五年間で二回帰っただけです。ただ、父が一度上京して会いに来てくれたことがありました。

専門の授業は、内科から婦人科まで全部あり、臨床もあって厳しかったのですが、別に苦痛ではありませんでした。すでに支那事変が始まっていたのですが、女子医専の中では、あまり影響は感じられませんでした。

1941年に女子医専を卒業し、荒川の近くに下宿して賛育会病院の小児科に勤めました。月給は31円でした。当時は、医師の国家試験はなく、医専を卒業さえすれば医者になったのです。一年ほどして、今度は浅草の近くの救世軍病院の産婦人科に勤めました。休みの日でも診察や当直があるので、映画もなかなか見れず、たまにデパートに買い物に行ったりするくらいでした。

当時、私は改姓名をしていませんから、皆からは日本語の漢字音で「廖(りょう)」さんと呼ばれておりました。また、自分は内地人とは違うが、それでも日本人だと思っ

ていました。支那人だとは思っていませんでしたから、台湾の独立とか支那への復帰などは夢想したこともありませんでした。

1943年の6月、大東亜戦争がたけなわの頃、東京にいた叔父の娘と一緒に台湾に帰ることになりました。二年間で蓄えた300円の現金を懐にして、東京から福岡まで汽車で行きました。当時、制海権はアメリカに奪われていましたので、福岡からは特別の伝手を頼って台湾行きの陸軍の飛行機に乗って帰って来たのです。

東京では、時には内地人の友人や先生から軽んじられていると感じたこともありましたが、今思い出しても東京での生活は楽しいものでした。

故郷の豊原に帰ると、中野の下宿にいた頃、東京女子医専に入学する際に世話になった学生と同じ名前の李朝湖医院というのがあったので驚きました。東京で別れてから、7~8年が過ぎていたのです。

早速、李朝湖医師に挨拶に行き、東京で世話になった礼を述べました。「お子さんは何人ですか」と聞いたら、「まだ独りです」と言うので、冗談かなと思ったのですが本当でした。私が開業する時、また面倒を見てくれたのでした。豊原の街では開業できず、李朝湖医師のアドバイスで生まれ故郷の神岡庄の隣の無医村の社皮で開業することになったのです。10年後には、豊原の街に移りました。

再会して一年ほど過ぎて、李朝湖医師と結婚することになりました。私が27歳、夫は36歳でした。夫は、豊原の漢方医の息子で、台中一中を出て、京都府立医科大学に入ったのですが、問題を起こして退学し、東京医学専門学校に入り直したのだそうです。

夫が軍医として召集されることになったので、大急ぎで1944年の9月に式を挙げることにしました。新婚の夢に浸る間もなく、夫は一ヶ月も経たないうちに南方に出征してしまいました。高雄の近くの左營の軍港から出征するというので、左營まで見送りに行ったのです。港の中には入れませんでした。夫は一年後には必ず生きて帰って来ると信じておりました。

それが、翌年の一月、役所から夫の戦死の通報が来たのです。実は、その前の日に「無事である」というサイゴンからの夫の葉書を受け取ったばかりでした。頭が真っ白になってしまいましたが、どうしても夫の死を受け入れることは出来ませんでした。その時には、おなかの中に夫の子供が宿っていたのです。

夫と一緒に出征した医者のお話ですと、サイゴンの港に停泊していた船が、アメリカ軍の飛行機に爆撃されて沈められたのだそうです。甲板にいた人たちは、海に飛び込んだのですが、夫は船室の中にいたため逃げ遅れて、船と一緒に沈んでしまったとのことでした。

八月二日に、夫の忘れ形見の息子が産声を上げました。息子の誕生を知らずに逝ってしまった夫、父のない子として生まれてきた息子のことを思うと、母になった喜び

よりも夫と息子が不憫でなりませんでした。

息子の誕生から間もなく敗戦の報に接しましたが、悲しくて涙を留め得ませんでした。しかし、一ヶ月ほどして、台湾人は祖国の中国に戻るのだという国民党の宣伝に乗せられて、これで中国人になれると喜んでおりました。それが、進駐してきた兵隊たちの草鞋を履き、鍋釜を載せた天秤棒を担いでヨロヨロと行進する姿を見た瞬間、期待が失望と落胆に変わってしまいました。

その後は、悲劇の二・二八事件と白色テロが続き、今更ながらに日本時代が懐かしくなりましたが、その時はもう手遅れでした。私は、夫の死を悲しむ暇もなく、仕事と子育てに追われることになりました。豊原に医院を開業して、84歳まで診察を続けていたのです。夫の忘れ形見も、還暦を過ぎて社長から退き、隠居の身です。今では、お迎えを待つだけの身になってしまいましたが、全ては運命だったと思って毎日を過ごしております。

(27) ルソン島の従軍看護婦

中野トミ子 (1924年生) 台北日赤看護婦養成所修了

父は熊本の玉名、母は鹿児島霧島の出身です。父は、蔵前工業の機械科を卒業して基隆の造船会社の技師として働いておりました。

私は、この両親の下で基隆に四人きょうだいの長女として生を享け、五歳まで過ごしました。その後、台北の松山小学校に入学したのを皮切りに、父の仕事の関係で、高雄、基隆の近くの金鉱山で有名な金瓜石の小学校と転校を繰り返しました。とりわけ金瓜石には四年ほどいましたが、今思い出しても人生で最も幸福な時代でした。

小学校を終える頃に父が急逝し、私は一人鹿児島の母の実家に身を寄せ、女学校に通うことになりました。当時、出征軍人の家には黄色い旗が立てられていたのですが、それを見て、憂国の軍国少女だった私は、「羨ましいな。私が男だったら御国のために尽くせたのに」と思うようになりました。それで、女でも御国のために尽くせるということで、女学校を中退して自分から日赤の従軍看護婦になることを志願したのです。

それで、再び台北に戻り、昭和16年に日赤の看護婦養成所に入りました。10倍以上の倍率を潜り抜けて、20名ぐらいが入所しました。中に台湾人の同僚が3名ほどおりましたが、差別などは一切なく仲良く過ごしておりました。

養成所は、授業料や寮費は一切掛からず、小遣いまで出ました。ただ、養成所を修了すれば、10年間軍の衛生勤務に就くことが義務付けられておりました。たとえ、子供がいたとしても、兵隊と同様に赤紙の召集令状で戦地に赴くことになっていたのです。

養成所では、寮に入りましたが、「女の軍隊」と言われたほど、軍隊式に厳しく仕込まれました。一部屋に5~6人が入りましたが、朝五時に起床して、掃除、診察準備、朝食配膳と続き、朝食を慌たたく済ませて、看護帽に看護服姿で学校へ駆け込むのです。

学科は、看護学、衛生学、救急法、包帯法、患者運搬法、病理学、解剖学などの専門の他にも、国語、数学、修身、歴史、地理などもありました。自由時間にはハーモニカを吹いておりました。また、四人一組の担架訓練では軍歌を歌いながら運んでおりました。先生方は、日赤の先生が主でしたが、外部からも来ていました。

実習は日赤の病院のそれぞれの科で行い、夜九時の消灯時には、廊下に全員整列して点呼を受けてから就寝しておりました。養成所は本来三年の課程でしたが、戦時中だったので短縮され、二年三ヶ月で修了しました。

昭和18年の五月に赤紙で召集され、私たち日赤第三四一救護班は、高雄から病院船「白山丸」で、フィリピンのマニラに派遣されました。私たちの班には、台湾人の同僚が一人おりました。マニラでは、陸軍のマッキンレイ六三兵站病院に勤務することになりましたが、給料は50円でした。

当初、マニラは大変平和な街でした。一般の市民も日本人に反感を示すことはありませんでした。病院には、ハイスクールを出たフィリピンの娘さんたちが看護助手として勤務していましたが、何のトラブルもなく仲良く働いておりました。休日には、同僚と一緒に映画を見たり、軍指定の「甘党陣屋」で食事をしたりして、戦時下の青春を謳歌しておりました。マニラにいた頃は、食べ物も豊富にあり、時折慰問団も来て本当に楽しい毎日でした。

それが、昭和19年の9月頃からアメリカ軍の空襲が激しくなりました。その頃、内地送還の患者をマニラ港まで運び、病院船に乗せて見送ったことがありました。港外まで見送っていたのですが、突然病院船が大音響とともに真っ二つに割れ、見る見るうちに沈んでしまったのです。呆然として、全身冷や水を浴びた思いで帰路に就いたのでした。

間もなく、病院はパッシング河畔のマングルヨンに移転しました。何でも、精神病院の跡地とのことでした。連日、灯火管制の下での仕事で、楽しかったマッキンレイでの生活が懐かしくなりました。

マングルヨンに移ってから、空襲は激しくなるばかりで、病院の小高い丘から空中戦が遠望できました。ある時、敵機が木の葉のように舞い落ちるのを見て、手を叩いて喜んだことがありましたが、良く見ると尾翼に日の丸が付いておりました。

マングルヨンでの生活も二ヶ月あまりで終わり、12月の終わり頃に、北部ルソンのムニオス分院に転属することになりました。北部ルソンでは、ムニオスを振り出しに、終戦まで山田部隊長の庇護の下に、飢餓の戦場で生死をともにした流転の日々を

送ることになったのです。四班編成で、一班は25名でした。私の班では五名が亡くなっています。空襲はありましたが、現地人は既に逃げていて遭遇はしませんでした。私たちの班には台湾人の同僚が一名おりました。医療は、外科が主でしたが、薬も設備もない中での業務でした。白衣では標的にされるので草色に染めておりました。

ムニオスでは、病理室勤務に回されて張りのある毎日でしたが、ここも戦況が緊迫してきたので、半月あまりで、またトラックに護送されて北上し、イネアンガンという部落に到着しました。途中、銃撃を受けたり、夜間ゲリラの合図らしき狼煙を目撃したりと緊張の連続でした。

イネアンガンでは、原住民の小屋を仮の病舎として勤務することになりました。床下が豚小屋だった病舎は、蚊と蚤の襲来が激しくて夜眠れず、すっかり睡眠不足になってしまいました。数箇所しかない井戸水は貴重な飲料水となり、生活用水は部落から少し離れた川から日に何度となく往復して汲んできておりました。食事は、小さな御握りと野生の春菊を浮かした薄い汁一杯の配給だけでした。

ある日の不寝番勤務の折、当直日誌を書き終えてランプ片手に小屋の病室を回っていた時のことです。突然患者さんに、「看護婦さん、子守歌を聞かせてください」とせがまれました。訳を尋ねると、「今夜は寝付かれず、故郷に残してきた子供のことがしきりに思い出されるのです。もういたずら盛で女房を困らしていることでしょう」と弱々しく笑ったのです。それで、ハミングで子守歌を歌ってあげると、「どうも有り難う」とにっこり微笑んだのですが、それが最後の笑顔になってしまいました。

日増しに空襲が激しくなると、病院は平坦な地から樹木の生い茂る山間の地へと移動しました。病院は急造の建物で、竹を二つに割って並べた床に、四本の柱を立てて、屋根を斜めに取り付けたお粗末な小屋でした。これが幾つも建てられ、病舎にも控室にもなりました。

密林の中では、銃撃は避けられても、マラリア、熱帯潰瘍、赤痢が多発し、栄養失調も加わって患者は増える一方でした。一つの病舎に五人から八人が収容されて、いつも満員でしたが、毎日のように天に召されて行きました。皆さん家族の写真を身に付けていたのも心に残ります。愛児の名やお母さんという言葉は何度聞かされたことでしょうか。昼の勤務は、遺体運びが日課のように繰り返され、草叢に穴を掘りましたが、人手が足りなくて一つの穴に三体も四体も一緒に埋めたものでした。

この頃、私どもには忘れることの出来ない事件が起きました。同じ班の国上さんと堀江さんの両名が調理した毒豆に当たって若い命を散らしてしまったのです。また、次の転進地のレストハウスでは、マラリアから回復して今日から出勤できると張り切っていた同僚が、出勤途上に機銃掃射で心臓を打ち抜かれて即死してしまいました。笑顔さえ浮かべた穏やかな死に顔でした。

昭和20年5月、奥地へと転進命令が下りました。私たちは必要な物を除いて、一

切を焼却し、各自分担の衛生材料とわずかな食糧を背囊の両側にしっかりと括り付け、持てるだけの荷物を背負い、行き先の定まらぬ山道の行進を繰り返しました。昼間は、密林に潜り込んで食糧を集め、夜になると、細い山道を松明で照らしながら長蛇の列に加わって進むだけでした。行き倒れのまま放置された日本人の遺体も方々で目にしました。

4月以来、塩以外の調味料は見ることも口にすることもなくなったまま、転進最後の地点の諏訪村での生活が始まりました。諏訪村は、日本人の開拓者が住んでいた村ですが、元々はイゴロツト族の部落で、段々畑が広がっておりました。諏訪村で、ようやく雨露を凌ぐ家らしいものに落ち着きました。

諏訪村では、毎日食事をどうするのかというのが最大の関心事でした。およそ食べられるという野草は根こそぎ芋類とともに雑炊に混ぜましたが、燃えない焚き木にむせびながらの雑炊作りは時間も手間も掛かって大変でした。そんな時、爆音でも聞こうものなら大変で、慌てて水を掛けて火を消すのです。一度、畑で芋を掘っていた時、低空飛行に見付かって前後左右に機銃掃射を受けたことがありましたが、掠り傷一つ負わなかったのは実に幸運でした。

昼の騒動の後、夜になると、山はいつもの静寂さを取り戻し、谷間の水音にも故郷が思い出されて話題は際限もなく続きます。何でも無い内地の日常茶飯事が時に堪らなく懐かしく思え、美しい旋律となって脳裏を掠めていきます。人間いざとなったら、どんな環境でも生きていけることを身をもって体験したのです。

衛生材料の補給も絶たれたまま、手持ちの品は日を追って減少していきました。ガーゼ交換のできない時は、もっぱら傷口から蛆虫を取り除くのが私たちの仕事でした。蛆虫が這っている間はまだしも、蟻が這い出す頃はもう死期が間近で、意識の朦朧とする中で、「もうだめだ、早く楽にしてくれ」と、うわごとを口走る者もいて、まるで地獄の中にいるようでした。

7月の初旬、山下奉文將軍閣下の一行が諏訪村を通過することになり、私たちは接待役を命じられました。一同張り切って、清掃にも念を入れ、薬室から取って置きのサッカリンを使ってサツマイモのきんとんを作り、玄米を煎って差し上げましたところ、「細かい心遣いだ」と大変喜ばれました。汗を拭きながら、一人一人に健康状態について尋ね、「ここでは栄養を取れと言う方が無理だが、体には充分気をつけて、必ず親の待つ故郷の土を踏めるよう頑張ってください」と、慈愛溢れる言葉を掛けてくれました。わずか一時間ほどの休息でしたが、言葉通り故郷に帰り、今日まで無事過ごして来られたことを心から感謝しています。

八月に入ると、空襲は益々激しくなり、遠くまで食料を探しに行くことも出来なくなりました。ある日、部落の空き地に全員呼び出され、上官の訓示がありました。

「我々も最後の決心をする時が来たようだ。男は患者と言えども歩ける者は決死隊

となって戦闘部隊に続く心の準備をしておくように。女は大和撫子として恥ずかしくない最後を飾ってもらいたい」

悲壮な話でしたが、その命令が何時下るのか、落ち着かぬ気持で待ちながら、手にした昇汞錠を見つめて、漠然と死というものについて語り合いました。生への執着と、死への憧れが交差して虚ろな日々が何日か過ぎた後、運命の8月15日を迎えました。絶対捕虜にはならないと思っていましたが、天皇陛下の命令だからと説得されて、マニラに移送されてカロンパンの収容所に入りました。

九ヶ月ぶりに人間らしい食事にありつけたのですが、一難去ってまた一難で悪性のマラリアに罹ってしまいました。危うくマニラに取り残されるところでしたが、皆さんの手厚い看護で回復して帰国が許されました。安静入院中の二人や病院勤務の方たちと最後のお別れをして、心を残しつつマニラの港を後にしたのが12月10日でした。

一週間後、広島の大竹に引き揚げて来ましたが、大変寒くて雪が舞っていました。冬服を持たない私たちは寒さと珍しさで大騒ぎでした。大竹の駅で、この一年間運命を共にし、苦楽を分かち合った班の同僚と、何時の日か再会できる日を約して、北へ南へと、涙とともに一同散会しました。

復員した時、母たちは、まだ台湾に残っていたので、私独りが鹿児島の実家に引き揚げて看護婦の仕事を続けました。後に、横須賀に移って学校の保健婦の仕事をすることになり、定年まで勤めました。現在は年金暮らしですが、青春の命を燃やした若き日の思い出を辿りながら毎日を過ごしております。

(28) 霧社の残影

杜欽明(民族名:ピドネヨン)(1930年生)霧社公学校卒

私は、台湾先住民のセイダッカ(*タイヤル族の一支族)族の出身です。タイヤル族とは、言葉や習慣が多少違います。父は、学校に通いませんでしたが、母は、四年制の蕃童教育所(*先住民のための初等教育施設で警官が先生として教えていた)に通っていたようです。

私が生まれた年の昭和五年の10月27日の朝に、台湾全土を震撼させた「霧社事件」が起きました。私が生後七ヶ月の時でした。母の話ですと、農繁期に木材運搬などの重労働をさせられたのに賃金をもらえなかったり(*当時、先住民の出役には、日当50銭が支払われていた)、また警官が霧社の女を妻にしておきながら、内地に帰る時捨てていたり、若者が巡查に侮辱されたりして色々感情的な縫れが重なり、もう我慢できないから内地人を殺そうということになったのだそうです。

しばらく様子を見ていたのですが、「状況が良くなれば生きる、悪くなれば死ぬ」

と、全員こう思っていたとのこと。それが、もう生きる望みがなくなったからということで、内地人を皆殺しにし、子供は首吊りさせて皆自殺することに決めたのだそうです。幸い、父の出身部落を含めて五社は蜂起に参加しなかったので、助かったとのことでした。

父の話ですと、最初の計画では、セイダッカ族の十一社の部落全体が参加して、昭和六年の正月に決起するつもりだったのが、山奥の部落の人たちが早まって前年の10月27日の公学校の運動会の日に行き、内地人を百三十人以上殺害してしまったのだそうです。

麓側の部落の人たちは、家族をどうするかなどの準備が出来ていなかったので参加しなかったとのこと。総督府は、軍隊や協力的な先住民を動員し、「降伏したら殺さない」と言って騙して、降伏してきた者たち十何人をまとめて手を針金で縛り、殺して穴に埋めたのです。それで恐怖を感じた者たちが覚悟の首吊りをして果てたのですが、セイダッカ族の死者は六百人以上に上ったそうです。

降伏して警察に保護されていた先住民は五百人ほどおりましたが、翌年の4月25日の未明に、敵対していた部落の者たちに急襲されて、主に15歳以上の男子約二百人が殺害されてしまいました。内地人の遺族の恨みを晴らすために、警察が唆した虐殺との噂でした。

その後、生き残った者たちは、山並みを越えて直線距離で30キロほど西に離れた川中島に移され、官憲の監視の中で農業に従事させられるようになりました。ですから、霧社には、山奥の部落にも叛乱を起こした者たちの子孫は住んでおりません。

麓側の部落が参加しなかったので、セイダッカ族は生き残った訳ですが、もし麓側の部落が参加していたならば、セイダッカ族は絶滅していたことでしょう。

そのような悲劇の影を引き摺っていた霧社で、私は生まれ育ったのです。霧社の人たちの生業は焼畑農業で、山の斜面の木を切り倒して火を入れ、灰を肥料にして作物を栽培しておりました。二、三年経つと土壌が瘠せてしまうので、また新しい所に焼畑を作るのです。

昔は粟が主食でしたが、総督府の授産課の指導で、粟ばかりでなく、芋や米なども栽培するようになりました。米は、谷間の川辺に水田を開き、在来米（*インディカ米の一種）や蓬莱米（*ジャポニカ米の一種）を栽培しておりました。副食としては、野菜や魚、それと猪などを獲って来て食べていました。昔の生活は原始的で、全くの自給自足でした。家は、萱葺きの粗末な丸太小屋で、隅に竹で作った寝台を置き、中央に囲炉裏を切っておりました。

私は、蕃童教育所ではなく、漢族との共学の霧社公学校に通いました。一学年50~60人のクラスでした。セイダッカ族だけではなく、平埔族（*平地に住んでいた漢族化した先住民）や漢族の子弟も通っていました。内地人の子弟は霧社小学校

に通学していましたので、おりませんでした。本科が四年で、その上の補習科が二年でした。先生方は、皆師範学校を出た内地人の先生でした。

一年から日本語を習いました。内地人の先生は厳しくて、子供が言うことを聞かないと叩くのです。二年生になると、アクセントが少し違ってはいましたが、すらすら話せるようになりました。学校の中ではセイダッカ語を使うと叱られましたが、家ではセイダッカ語を使っていました。また、畑仕事をする時は、セイダッカ語と日本語のチャンポンで話しておりました。ただ、公学校の六年の教科書は、小学校の四～五年程度のレベルでした。

私の民族名は、「ピド ネヨン (*ネヨンは父の名)」と言いますが、六年の時に「松本敏彦」と日本名に改名しました。別に、どうと言う感慨はありませんでした。

教科書やノート、鉛筆などの学用品は、学校が無料で配布してくれました。授業料もただでした。経済的な負担がなかったので、先住民の子供は、ほとんど全員が教育所や公学校に通っておりました。ちなみに漢族の子弟の就学率は五割ぐらいでした。

後で、高雄の近くの岡山の海軍の工廠で働いていた時、平日の昼なのに道で子供が遊んでいたの、「なぜ、学校に行かないで遊んでいるのか」と聞いたところ、「学校には通っていない」ということが判って驚いたことがありました。

公学校時代は、制服はなく、貫頭衣のような粗末な民族服を着ていました。予習復習や宿題などはなかったの、教科書は学校に置いておりました。カバンや風呂敷もなく、薦で編んだ網の中に昼御飯のサツマイモや握り飯を入れて背負い、山道を一時間半掛けて裸足で通学していました。

ただ、今でも不満に思っているのは、漢族の子供は上級学校に行けたのに、セイダッカ族の子供は、いくら成績が良くても上級学校に行けなかったということです。愚民化政策を採っていた理蕃課の方針だったのだと思います。

理蕃課は、先住民の子供を上級学校には行かせずに、直ぐ青年団に入れて日本語で軍事訓練をしておりました。公学校は教育課の管轄でしたが、青年団は理蕃課の管轄でした。この訓練を受けた者たちが後に高砂義勇隊に入って、南方の前線で武勲を轟かしたのです。

卒業式の日、「仰げば尊し」の歌詞の「身を立て名を挙げ、やよ励めよ」の説明で、先生に「『世の中の人に認められる立派な人になれるよう努力しなさい』」という意味だが、山地の子供は上の学校に行かないから、そんなことは考えなくても良い。だが、平地の子供は心に留めておかなければならない」と言われたことが、今でも痛い記憶として残っています。

実際、山地の子供は幾ら成績が良くても、警察の給仕になるのが関の山でした。ただ、例外的に埔里小学校の高等科から台中師範の講習科に進んで巡査になった花岡一郎 (*民族名;タックス・ノービル) や、埔里小学校の高等科を出て警丁になった花岡

二郎（*民族名;タックス・ナウイ）がいました。名前だけ見ると兄弟のようですが、官憲に付けてもらった名前で、実際には血は繋がっておりません。セイダッカ族の出世頭でしたが、不幸にも霧社事件に連座して自殺してしまいました。

理蕃課は、師範学校を出た花岡一郎を正式の教員にせず、巡査にしていますが、これも先住民に対する差別政策の一例でしょう（*当時、山地に勤務する公務員は警官に限られていたので、教育所の先生や医者も身分上は全て警官であった）。

私は14歳で公学校を卒業しましたが、優等生として賞品や賞状をもらいました。しかし、両親には、中学校に行けとは言われず、ただ山の仕事をやれとだけ言われました。母の頃は、日本語が解りさえすれば良かったのですから、両親は教育の重要性を認識しておらず、ただ公学校を卒業さえしていれば、それで充分だと思っていたのです。実際、先住民には子弟を上級学校に進ませるだけの経済力はありませんでした。

それで、進学は諦めて、夜間の国語講習所に何ヶ月か通うことになりました。先住民は、青年団に入るのが普通だったのですが、私は入らずに警察の給仕の試験を受けて合格し、給仕になりました。給料は14円でしたが、よく馬鹿にされて辛かったので、10ヶ月ほどで辞めてしまいました。

その後、技術者を夢見て岡山の海軍の工員養成所に入り、ゼロ戦を造っておりました。給料は25~6円でしたが、忙しい時は34~5円ぐらいいもなりました。内地人や漢族とは別に喧嘩などせず、仲良く過ごしておりました。

敗戦の報に接した時は、せっかく今まで日本のためにやってきたのが無駄になってしまい、がっかりしてしまいました。当時は、支那人になるのが嫌だったのです。

国民党の時代になってからは、漢族名に改姓名させられ、日本語の代わりに北京語の学習を強制させられるようになりました。ただ、セイダッカ族の場合、二・二八事件に巻き込まれた人はおりませんでしたし、また戒厳令下の白色テロにも遭わなかったのは幸運でした。

国民党は、先住民との協調を考えたのでしょうか、優遇策として先住民の税金を免除（*日本時代も税金は免除）し、「生活改進黨」を押し進めてくれたのです。先住民も果物や野菜、それと茶の栽培で経済的にも豊かになり、居住環境が近代化されて生活が目に見えて向上してきました。ですから、粗末な萱葺きの小屋しかなかったこの村も、日本時代には考えられなかったような近代的な家屋に建て替えられて、文化的な生活を送れるようになりました。

また、日本時代には上級学校への進学は夢だったのですが、国民党は、先住民の成績の良い子弟を優先的に上級学校に進学させ、学費を免除して援助してくれました。御蔭で、セイダッカ族からも医者や先生が出るようになったのです。そういった点では、セイダッカ族は国民党に感謝しております。

ただ、今では税金も払わなければなりませんし、農産物も昔のように売れなくなっ

てしまいました。若い人は、皆台中や台北の街に出て、現金を得られる仕事をするようになってしまったのです。私も80歳を過ぎましたので、今は隠居の身ですが、日曜には近くの教会に通って信仰の毎日を送っております。

(29) 台湾から沖縄へ

大島誠吉(旧名;陳丁喜)(1930年生)大湖国民学校卒;高座海軍工廠少年工

私の両親は客家系で、父は新竹州の大湖で鍛冶屋をしていましたが、農地はありませんでした。両親とも台湾服に裸足でした。母は客家系ですから纏足はしていません。両親とも学校には通っていませんので、全くの無学です。私のきょうだいは6人で、上に姉が二人と兄で、下には弟と妹がおります。上の姉は、両親に子供が出来なかったため、養女として入っていたのです。その後、下の姉が生まれたのですが、直ぐ養女に出されてしまいました。私のきょうだいは全員公学校や国民学校を出ていますから、当時の田舎では恵まれていた方です。

当時の大湖の田舎は、道は砂利道で水道はなく、川からバケツで水を汲んで来て生活用水として使っておりました。電気も通っておらず、ランプの生活でした。時折、客として閩南系や刺青を入れて民族服を着たタイヤル族が農具の修理などに来ておりました。

ただ、生活は裕福とは言えませんでした。私が三年の頃、父が体を悪くして鍛冶屋を止めてしまったので、母を始め、休日には私たちきょうだいも森林伐採の現場まで必要物資を運搬する仕事をしていました。私は、一年から六年まで新しい服を買ってもらったことはありません。ずっと兄のお下がりを通していました。海軍の工場に行く時になって初めて新しい服を買ってもらったのです。

私は他人より二年遅れて、大湖公学校(*1941年に国民学校に改称)に入学しました。一学年三組で「い」、「ろ」、「は」の三クラスがありました。一クラスは50人前後だったと思いますが、男女は同じクラスでした。ただ、女の子は少なく、五列のうち三列が男の子で、左右に分かれていました。

大湖公学校の先生は、校長先生を始め、内地人が多かったのですが、客家人の先生もおりました。一年の時の担任は、羅氏金妹という三十代の客家人の女の先生でした。日本語を教える時は、客家語を交えて教えてくれました。学校では、一年から日本語を話すようにしていましたが、不自由なく日本語を話せるようになったのは三年になってからでした。四年になると、皆日本語で話すようになっておりました。低学年では、客家語を使っても怒られませんでした。高学年になると叱られるようになりました。

三年は、内地人の古屋という二十代の女の先生でした。古屋先生の父は、大湖の庄長を務めておりました。四年は、やはり内地人の伊藤という二十代の女の先生でした。

女の先生方は、優しくったのですが、誰か一人が悪さをすると、連帯責任として全員が手のひらを鞭で叩かれました。五年と六年は内地人の杉山という40代の男の先生でした。杉山先生は海軍上がりで、威厳のある厳しい先生でした。ただ、叩いたりすることはなく、口で叱っておりました。五年、六年の時は、男子だけ放課後に農業があって、堆肥造りなどをさせられていました。雨の日を除いて毎日朝礼があって、国旗掲揚と君が代斉唱の後、校長先生の訓話がありました。天長節などの式日には、勅語奉読があり、式後には紅白の餡入りの餅をもらいました。

制服はなく自由で、学生服を着ている者もいるし、台湾服を着ている者もありました。帽子やカバンはなく、風呂敷に裸足で通学していました。弁当は、在来米に野菜中心のおかずを詰めて持っていきました。家では、在来米とサツマイモを混ぜて炊いた御飯を食べていましたが、肉や卵はめったに食べられませんでした。

学校の校舎は、木造の平屋で、屋根は台湾瓦でした。講堂はなく、教室の仕切りを外して講堂代わりに使っておりました。運動場は広くて、端から端まで百メートルぐらいあり、一周三百メートルぐらいのトラックがありました。

運動会の時には、娯楽の少ない時代だったので親が見に来て、一緒に弁当を食べておりました。学芸会もありましたが、運動会と違って親はあまり見に来ませんでした。

同じクラスの卒業生は、60人ぐらいでしたが、上級学校にはほとんど入っておりません。ただ、高等科には10人ほどが進んでいます。当時の台湾の田舎は貧しかったのです。

私は成績がクラスで三番でしたが、家の経済状況を考えて、進学は諦めざるを得ませんでした。実際、一番の人は、上級学校に進みましたが、二番の人は行っていません。私も、杉山先生から上級学校への進学を勧められたのですが、家の事情が許しませんでした。

そんな時、内地の高座の海軍工廠で少年工として働かないかという話がありました。ただ、「工廠に行って仕事をすると、工業学校卒と同じ資格が取れる」とは聞いたことはありません。それでも、内地への憧れもあり、渡りに船とばかりに応募しました。両親に相談したところ、反対せず賛成してくれました。兄は、警察局長の給仕をしていましたし、次姉は生まれて直ぐ養女に出されておりました。大湖国民学校には、四名が割り当てられていましたので、試験ではなく推薦で選ばれました。筆記試験はなく、身体検査と体力検査がありました。

昭和19年の4月、基隆から他の少年工たちと一緒に「アラビア丸」に乗り込みました。アメリカの潜水艦の攻撃を避けるため、大きく迂回して行きましたので、大分時間が掛かりました。着いたのは呉でしたが、直ぐ汽車に乗って高座に向かいました。

高座では寮でしたが、私たちの部屋は皆客家家で、10人ぐらいが入りました。ただ、四月というのに部屋には暖房がなく、床に蒲団を敷いて寝ていましたが、南国の

台湾から来た私たちには大分応えました。風呂も一週間に一、二回で、後は水で体を拭いておりました。

生活は完全に軍隊式で、六時頃に起こされて並んで点呼を受け、工場にも整列して通っておりました。消灯は10時でした。食事は、御飯に味噌汁と日本料理のおかずで、戦時中にもかかわらず、十分食べられましたから、ひもじい思いをしたことはありません。

私は、高座の養成所で三ヶ月の基礎訓練を受けてから、横須賀の爆弾を製造する工場の「仕上げ班」に回されました。月給が幾らだったのかは、もう覚えておりません。横須賀に移ってからは、寒さに苦しめられることはありませんでしたが、シラミやノミには悩まされました。台湾には、南京虫やノミは多かったのですが、シラミはあまりいませんでした。

夕方、工場での仕事が終わると、真っ直ぐ寮に戻って来て、部屋で話をするだけで、別に娯楽はなく、本も読めませんでした。私の班は、全員客家人ですから、寮では皆客家語で話しておりました。ただ、工場では、閩南系の台湾人や内地人もいますので、皆日本語で話していました。日曜日は休みでしたが、江ノ島、鎌倉、横浜、渋谷などに仲間と一緒に出かけ、街をうろついておりました。当時は、別に楽しみはなく、ただ家が恋しくて台湾に帰りたいの一心でした。

養成所の指導員は、二十歳ぐらいの中学校を出た閩南人でした。寮の管理も閩南人が担当しておりました。寮では、内地人に苛められることはありませんが、職場では内地人に馬鹿にされることもありました。ただ、私たちは子供だったので勝ち目はなく、喧嘩はしませんでした。また、軍事訓練もありませんでしたし、指導員に殴られるということもありませんでした。当時、自分のことは客家人で内地人とは違うと思っていましたし、大陸の支那人とも違うと思っておりました。

終戦は、横須賀の工場で迎えました。最初は解らなかつたのですが、内地人の先輩が泣いているので、負けたということが判りました。ただ、悔しいとか残念だとかは思わず、「これで家に帰れる」と嬉しかったのですが、顔や口に出す訳にはいきませんでした。終戦後には高座の工場に移りましたが、仕事はなくなってしまいました。ただ、小遣い程度はもらっていましたので、寮でぶらぶらしたり、外に出て街をうろついたりしておりました。

終戦の放送を聞いた後でも、台湾は日本に残ると聞いていました。台湾が日本から離れて中華民国になったということは、台湾に帰って来て父に聞かされるまで知らずにいたのです。父は、常々日本のままの方が良かったと嘆いておりました。

昭和21年の3月頃に、横浜から乗船して基隆に帰りました。大湖へ帰って両親に会いましたが、「良く帰って来たな」と喜んでおりました。大湖に戻ってからは、他の農家の下働きをしていましたが、二、三年後には森林の伐採の仕事に移りました。

当時、養女に行っていた次姉が客家系の外省人の漢方医と結婚して東海岸の玉里で薬局を開いていたので、今度は二年間ほど薬局で働くことになりました。外省人との関係は悪くはなかったのですが、民度の低い者が多く、自分とは合わないと思っていました。

31歳の時、国民党の軍隊に召集され、台中の陸軍の訓練中心に送られて三ヶ月ほど訓練を受けました。その後、高雄の左營で待機していましたが、大陸の沿岸の金門島に送られることになりました。金門島には、二年余り通信兵として勤務していましたが、毎日のように大陸から砲撃を受けていました。通信兵ですから後方勤務でしたので、無事帰って来られました。

国民党の軍隊は体罰がありませんし、上下の区別も厳しくなく、兵士たちは暇があると花札をしていましたから、その点では楽でした。二等兵で入隊しましたが、除隊する時には一等兵に昇進してありました。給料も支給されていたので、貯金も多少ありました。ただ、父は台湾に戻ってから5~6年後に亡くなっていて、母も金門島にいた時に亡くなっていました。

除隊後は、沖縄にいる知人に「沖縄で樟腦の仕事をしなにか」と誘われたので、沖縄に行くことにしました。別に、国民党が嫌だからというのではなく、台湾にいてもしょうがないので、沖縄に行けば将来の展望が開けるのではないかと思ったのです。昭和42年の12月のことで、私は38歳になっておりましたが、まだ独身でした。

最初は北部の東村で、山に樟腦の原料である樟の苗を植える仕事をしていました。二年ほどして那覇に移り、ポリエチレン工場で働くことになりました。昭和45年に、新竹の竹東出身の客家系で八歳下の女性と結婚しました。妻は、日本の教育を受けていませんから、日本語は全然駄目でしたが、北京語は流暢でした。私も国民党の軍隊にいたので、北京語もある程度出来ますが、妻とは客家語で話しています。

昭和50年に、日本に継続して五年以上居住している者には帰化申請する資格があると聞かされました。当時、沖縄には台湾人が六百人ほど住んでおりました。沖縄に骨を埋める覚悟でいた私たちは、直ぐ帰化することに決めました。既に沖縄に来ていた妹夫婦と弟夫婦と一緒に許可申請をしましたが、三ヶ月で許可されました。現在、兄と姉を除いて、他のきょうだいたちは皆沖縄に住んでいます。

帰化してからは、五年ほど台湾から移入した筍の栽培に従事しておりましたが、事業は順調に運びませんでした。その後、ブロック塀の仕事に切り替えて70歳過ぎまで続けてきました。

私の兄は五歳上ですが、終戦前に軍属として海南島に行っておりました。終戦後は、台湾に帰らず国民党の軍隊に入隊したのだそうです。その後、満洲に送られ、国民党の敗戦後も大陸に残って天津に住んでいるのですが、台湾には戻っていません。

私が兄に会ったのは沖縄に来てからで、那覇で二回会っています。私は、大陸には

一度も行ったことがありません。別に、行きたいとは思わないのです。ただ、台湾には毎年墓参りに帰っております。

沖縄は、日本と言っても台湾と気候や習慣が似ているので、台湾人にとっては大変住みやすい所です。私は沖縄に骨を埋めるつもりでいるので、沖縄に来たことは全然後悔しておりません。今では孫にも恵まれ、近所の人たちとグラウンドゴルフを楽しみながら余生を送っています。

続